郷土愛を育てるふるさと学習

―『天王子ども塾』の実践を通して―

Oldness and learning to bring up regionalism
―through the practice　“Tenno Kodomo Zyuku ~Four Devas child private supplementary school ”―

浅井厚視（愛知学泉大学客員研究員・津島市立南小学校長）　Atsushi　Asai

概　要

『過去に目を閉ざすものは現在に対しても目を閉ざすことになる』　（ヴァイツゼッカー）

子どもたちが身近な地域の歴史に気づき、正しい知識や情報を手に入れ、地域の課題を解決するための方法を考える場が必要である。私はこの６年間、津島ロータリークラブ・ＮＰＯまちづくり津島・天王文化塾から依頼を受け、『天王子ども塾』というふるさと学習のイベントと取り組んできた。郷土史家、教職を志望する大学生（学生ボランティア）の協力を得て、歴史学習のイベントを開催している。子どもたちにとっては、学校以外の場で歴史学習を展開する貴重な学習の機会となっている。津島市・愛西市・あま市など愛知県西南部に在住する小学生４・５・６年生が参加している。本実践は平成 23 年度から今年度までの６年間の実践をまとめたものである。

キーワード

郷土愛　　ふるさと学習　　天王子ども塾

目　次

1　『天王文化塾』と『天王子ども塾』
2　『郷土愛を育てる』とは
3　『天王子ども塾』の実践と分析
3.1 実践記録『ドキドキ弥生学習』
3.2 実践記録『ワクワク古墳学習』
3.3 実践記録『キャッスルワールド信長探検隊』
3.4 実践記録『祭りを学ぶⅠ・Ⅱ』
4　成果と課題

1　『天王文化塾』と『天王子ども塾』

私は子どもの頃から、歴史が大好きであった。その理由を考えてみると祖母が毎日語ってくれた『おはなし日本史』にあった。祖母の歴史の話は皇国史観に基づいていたが、人物中心で楽しいエピソードに溢れた歴史であった。私が住む津島のまちの歴史（大学生となった時、それは天野信景（さだかげ）が書いた『浪合記（なみあいき）』によることに気づいた）も本当にドラマチックな展開、大河ドラマを見ているようであった。祖母の歴史の話のおかげで、私は歴史が好きになった。私も津島の歴史につながっている存在であることを教えられた。祖母の話に比べれば、私の歴史の授業はストーリーのドラマチックさや楽しさが足りないように思う。

「天王文化塾」は、愛知県津島市で活動している市民活動団体である。平成１２年１月に地元の有志が集って発足し、以来歴史・文化を「学ぶ」分科会、郷土メニューを「食べる」分科会、町屋を保全し再生する「暮らす」分科会、全国の市民団体やＮＰＯとネットワークを結ぶ「知らす」分科会の４つの部会で構成されている。「町は私的空間ではなく、市民みんなのもの」といった理念のもと、地域に貢献

する各種事業を展開している。その中で特に「学ぶ」分科会は２ヵ月に１回講演会を開催し、会の例会・普及講演会としての機能を有している。ちなみに記念すべき第１回の例会（平成 12 年１月）では、私が『海部地区の弥生・古墳時代』と題して講義を行った。

「天王子ども塾」は、平成 13 年８月に始まった地域の子どもたちと一緒になって、郷土の文化や歴史を学ぶための活動である。第１回の「まち中の古井戸」の整備に始まり、「まちの秘密さがし」「織田信長の生誕地を訪ねて」「山車のからくり人形」「まちかどスケッチＴシャツ」「津島囃子」「地域の昆虫採集」「山車のジオラマ作り」などを実施してきた。どの年の会においても大学生の積極的な参加を促してきた。「天王子ども塾」では、「古くて面白いもの」を、子どもたちと「探し」「遊び」「学ぶ」ことで、子どもたちが身近な地域の歴史を発見し、参加の大人たちと郷土の課題に気づくことが出来るようなイベント活動である。これらの活動は、新世代育成を目指す「津島ロータリークラブ」との共催事業となっている。

平成 22 年度から、天王子ども塾で『ドキ☆土器☆弥生・古墳・城学習』として、教職を目指す大学院生・大学生の参加を募り、生涯学習の場で子どもたちが身近な歴史を学ぶ機会を設けることにした。

① 平成 23 年度「第 11 回天王子ども塾」
　ドキ☆土器☆弥生学習　28 名参加
② 平成 24 年度「第 12 回天王子ども塾」
　ワクワク古墳学習　22 名参加
③ 平成 25 年度「第 13 回天王子ども塾」
　キャッスル・ワールド信長探検隊　35 名参加
④ 平成 26 年度「第 14 回天王子ども塾」
　15 年戦争・聞き取り平和学習　26 名参加
⑤ 平成 27 年度「第 15 回天王子ども塾」
　祭りを学ぶ・フォトテーリング 46 名参加
⑥ 平成 28 年度「第 16 回天王子ども塾」
　祭りを学ぶⅡ・フォトテーリング 65 名参加

これは私の祖母が語ってくれた歴史を、遺跡から出土した遺物や祭りの体験学習を基にして、子どもたちに歴史を語りかける「場」にしていくことを狙っている。あわせて教職を目指す大学院生・大学生と授業づくりを行ってきた。子どもたちが興味関心をもつ歴史授業のあり方について共に考える場にしてきた。

2　『郷土愛を育てる』とは

昭和 40 年代（小学校は昭和 43 年、中学校は昭和 44 年）、文部省は学習指導要領の用語であった「郷土」を「地域」という言葉に訂正していった。これは「郷土」という言葉がもつ曖昧さを避け、子どもたちが生活している場所を「地域」（身近な地域）と記した。そして日本全体を「我が国」「郷土」ととらえる方向性をもちながら、「日本（世界）の諸地域」とは異なる「身近な地域」を学習させようとする意図がみられた。「地域」と「郷土」はどのように違うか。「地域」と言った場合、一定の地域が同じ性質をもつ（等質地域）と共に、行政的な意味合いが強いと考えられる。都道府県・市町村、或は市の東部・西部と言った分け方（形式地域）が多いと考えられる。こうして昭和 50 年代、60 年代から平成の現在まで、学習指導要領「社会」では「地域」という言葉が「郷土」に変わって使われ続けている。

平成 18 年、教育基本法の改正により、「教育の目標」として「我が国と郷土を愛する」ことが位置づけられた。

平成 20 年学習指導要領では、再び「郷土」という言葉が用いられるようになった。「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、・・・」（総則）「郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ」（道徳）これなどはナショナリズムの祖国愛ではなく、国際平和に寄与するための「郷土愛」が主張されることとなった。

人間の意識によって「地域」も「郷土」も変わっていく。人が主体となり、現代的で身近な課題を解決する「場」としての郷土のあり方が課題となっている。「郷土愛」を育てるとは、偏狂な所属地域のためだけの利益を目ざすものではなく「家族愛」の発展形として、また「祖国愛」や「国際平和」につながる感情として、人と地域とのかかわりを重視し、持続可能な発展社会をめざすバランス感覚のとれた愛情を育てることと考える。

3　天王子ども塾の実践と分析

3.1　実践記録『ドキドキ弥生学習』

平成 23 年８月 28 日、津島市観光交流センターにおいて「第 11 回天王子ども塾　ドキ☆土器☆弥生学習」を実施した。津島市と愛西市の小学校４～６年生 28 名が参加した。また教職を目指す大学院生・大学生７名が、学習支援のボランティアとして参加した。開校式では、本事業の責任者として、津島ロ

ータリークラブ会長から激励のあいさつを頂いた。その後で、午前中に弥生時代の津島についての学習をした。愛知県埋蔵文化財調査センターより、津島周辺で出土した弥生時代の土器を借用してきた。本物の遺物にふれた後、ペーパークラフトで弥生土器と銅鐸を作成した。昼からは、弥生人の顔に関する写真（人面土器）を何枚も見た。これらの写真は土器に描かれたものである。このスライドを基にしてイラストを描き、弥生時代のイメージをしっかりともつことができた。最後に子どもたちは、平成 22 年度から始まった『津島の達人　ジュニア歴史検定』の問題にチャレンジした。

開校式	９：３５～　９：４５
弥生時代を学ぼう	９：４５～１０：３０
弥生土器の製作	１０：４５～１２：１５
昼食・休憩	１２：１５～１３：００
弥生人を描こう	１３：００～１４：３０
津島の達人に挑戦	１４：４５～１５：３０
閉校式	１５：３０～１５：５０

教職を目指す大学院生・大学生のボランティア６名が、子どもたちの活動をサポートした。たまたま私が非常勤講師をつとめていた愛知教育大学から１人の院生と名城大学の５名の学生の参加があった。事前にメールで打合せ、当日も１時間前に集合し、最終の打合せとサポートの方法についての確認を行った。あくまでも講師を手助けするアシスタントとして、ペーパークラフトの土器作成の手伝い、イラストを描く際の色や形の助言などをお願いした。昼食の時間も含めて、グループに分かれたので、子どもたちと接触する時間を多くもつことができた。

閉校式では再び津島ロータリークラブの会長よりお褒めの言葉をいただいた。又参加した子どもたちと大学生が学習活動の感想を発表した。

【写真①　ドキ土器弥生学習】

子どもたちが興味をもつようにと弥生人の顔にこだわって、人面土器や土偶のスライドを多く見せることにした。弥生人といっても教科書に載っているような白い服、平べったい顔ばかりではなく、顔全体に刺青を入れた鯨面の人たちが色彩豊かな着物を着ていたことを説明した。

① 竪穴住居ジオラマ写真（大阪府立弥生博物館）
② 考古学とは　人とかかわったものを扱う学問
・遺構とは昔の人が掘った穴・溝・井戸・住居
・遺物とは昔の人が作った道具・ゴミ
クイズ１　弥生時代に納豆はあったか。
クイズ２　土器は食事をおいしくしたか。
③ 朝日遺跡の逆茂木、環濠集落のイラスト
④ 環濠集落・望楼・高床式倉庫・柵
⑤ 復元された吉野ヶ里遺跡の写真
⑥ 弥生時代のお墓方形周溝墓と人骨（朝日遺跡）
クイズ３　弥生時代にお菓子はあった
クイズ４　弥生時代の職業第１号は巫女であった
⑦ 弥生時代の時代の分け方　前期・中期・後期
⑧ 銅鐸（一宮市八王寺遺跡）の写真
⑨ 弥生時代の建物と井戸（池上曽根遺跡復元家屋）
⑩ 弥生時代の道具と弥生犬（大阪府立弥生博物館）
クイズ５　弥生時代のムラは海岸から遠い
クイズ６　弥生時代になって虫歯が増えた
⑪ 津島の弥生時代（寺野遺跡の遺物写真）
⑫ 奥津社古墳と三角縁神獣鏡の写真
⑬ 人面土器（安城市歴史博物館）の写真
⑭ 弥生時代の土偶の写真
⑮ 弥生時代の土偶（一宮市八王寺遺跡）
⑯ 津島の達人　ジュニア歴史検定の問題と解答

【スライド　学習内容　①】

人面土器などをもとにして、弥生人のイラストを描くことで、子どもたちにとって、弥生人がより身近な存在となり、イメージを豊かにすることができたと考えている。

清須市・一宮市・津島市にある遺跡を取り上げることで、身近に歴史があることに気づくことができたと考える。

今回の学習を通して、子どもたちは「パレススタイルの壷と甕」（いずれも愛知県埋蔵文化財センター）と「銅鐸」（大阪府立弥生博物館）のペーパークラフトの製作を楽しんだ。１時間半～２時間かけ、難しいところは大学生のアシスタントに教えてもらいながら製作した。ペーパークラフトは土器を面でとらえることができ、出土した遺物の破片をもとに全体の形を考えるトレーニングになると考える。平面のものを立体にすることができていた。

『ドキ☆土器☆弥生学習』の事後アンケートから、「弥生時代のことが　よくわかった 10 人　わかった 13 人　あまりわからなかった２人 (25 人中)」「弥生時代の学習が　好きになった９人　少し好きになった 14 人　変わらない２人 (25 人中)」と学習内容がよくわかり、学習活動が好きになったと好意的に回答した子どもが多かった。

子どもたちの感想としては「クイズなど簡単に楽しく覚えることができた。ペーパークラフトは難しいものを選んだ。難しかったけれどまたやりたい。弥生人の絵をかくのはバリバリ楽しかった」（６年女)「クイズがとても楽しかった。ペーパークラフトや弥生人の顔をかき、弥生人のいろいろな事が想像でき、よい経験をさせてもらいました」（６年女）「ペーパークラフトはあまり得意でなかったけど､作って体験したことで、土器の名前を覚えることができました」（６年男）「弥生時代の土器をさわることができて楽しかったです」（５年男）「納豆があることを知らなかった。弥生人の絵を描いたのがおもしろかった。犬がいるんだと思った。今日はありがとうございました」（５年女）「クイズなどで楽しく覚えることができた。弥生人の絵を描くのが楽しかった」（４年女）と書いていた。子どもたちは、感想の中でペーパークラフトの土器を作ったり、弥生人のイラストを描いたり、クイズを解いたりする学習活動が楽しかったと書いていた。子どもたちにとって地域への関心意欲を高め、興味をもって追究できる歴史の学習であったことがわかる。

参加した教職を目指す大学院生･大学生にとって、今回の活動は今後の学生生活でどのような学習をしていったらよいかという指針をつかむ場となった。「ペーパークラフトの土器作りに真剣に取り組んでいる子どもたちをサポートできた。出来上がった時の子どもたちの笑顔を見ることができ､嬉しかった。絵も自由に色を使って明るいイラストが描けていた。子どもと一緒に１日楽しく過ごす良い機会となった。今日で津島のことについて少し知ることができてよかった。子どもたちも自分の生まれた土地を知り、地域学習をすることの大切さを感じたと思う。私も社会科の授業を開発していくヒントにしていきたい。また参加させて下さい」（大学院生）「今日は１日楽しい時間を過ごした。私のグループの５人もとても良い子どもたちで、子どもと接する貴重な体験の場となった。私の説明不足でペーパークラフトの作成が上手に進んでいくことができなかった。でも、他のボランティアさんが助けてくれたので、とても嬉しかった。名城大学では小学校教諭の免許状を取ることができないが、小学生と接すると小学校の先生になりたいと思う。弥生人を描くとき、私も子どもたちに描かされて､みんなと打ち解けた感じがした。機会があれば又参加したいと思う」（大学生）大学院生・大学生の参加者はこの活動を通して、津島の歴史について興味関心をもつと共に、教職に対して新たな目標をもつことができたようである。

平成 23 年９月２日､津島ロータリークラブの例会で『青少年育成事業―ドキ☆土器☆弥生学習』と題して、事業を担当した浅井が報告を行った。ロータリークラブでは、新世代育成事業として位置づけられていた。プレゼンテーションを作成し、第１１回の天王子ども塾の様子について報告を行った。平成 24 年度の課題として、①大学生の積極的な参加を促し、教材準備・学習活動準備の段階から参加を依頼する。②子どもたちが食いつくような古墳や埴輪・土器に関するキットを準備することが挙げられる。

3.2　実践記録『ワクワク古墳学習』

開校式	９：１５～　９：３０
海部の古墳時代	９：３０～１０：００
海部の古墳見学	１０：１５～１２：３０
昼食・休憩	１２：４５～１３：３０
青塚古墳について	１３：３０～１４：００
古墳・土器づくり	１４：００～１５：３０
閉校式	１５：３０～１５：５０

平成 24 年８月 18 日、津島市観光交流センターにおいて「第 12 回天王子ども塾　ワクワク古墳学習」を実施した。あま市・愛西市・津島市の小学校４～６年生 22 名が参加した。また教職を目指す大学院生・大学生８名が、講師としてまた学習支援のボランティアとして参加した。今年度は１名の大学院生に学習会全体をテザイン・企画する段階から参加してもらった。

開校式では、本事業の責任者として、津島ロータリークラブ副会長から激励のあいさつを頂いた。その後で、午前中に古墳時代の津島についての学習をした。愛知県埋蔵文化財調査センターより、海部地区周辺で出土した弥生時代の土器を借用してきた。

（あま市甚目寺：阿弥陀寺遺跡・大渕遺跡）本物の遺物にふれた後、海部の古墳時代について知識を広めた。その後で「二ツ寺神明社古墳」「美和歴史民俗資料館」「奥津社古墳」の見学を行った。昼からは、犬山市にある県内２番目に大きな古墳である青塚古墳について学習したその後で青塚古墳のキットと青塚古墳から出土した土器をペーパークラフトで製作した。これらの学習をもとにして、古墳時代のイメージをしっかりともつことができた。最後に子どもたちは、今回の「ワクワク古墳学習」について学習の振り返りを行い、アンケートに回答した。自分の感想と意見をまとめることができた。子どもたちは理解した内容を確かにすることができた。

【写真②　大学院生による講義】

【写真③　学芸員による解説】

教職を目指す大学院生・大学生のボランティア８名が、子どもたちたちの活動をサポートした。愛知教育大学から２人の院生と名城大学から６名の学生の参加があった。内１人の社会科の院生は「青塚古墳とその出土物」について講義を行った。事前にメールで打合せ。当日も１時間前に集合し、最終打合せとサポートの方法についての確認を行った。あくまでも講師を手助けするアシスタントとして、ペーパークラフトの土器作成の手伝い、イラストを描く際の色や形の助言などをお願いした。昼食の時間も含めて、グループに分かれたので、子どもたちと接触する時間を多くもつことができた。

閉校式では再び津島ロータリークラブの副会長よりお褒めの言葉をただいた。又参加した大学院生・大学生も学習活動の感想をまとめた。

① 味美二子山古墳・三角縁神獣鏡の写真
② 考古学とは　人とかかわったものを扱う学問
・遺構とは昔の人が掘った穴・溝・井戸・住居
・遺物とは昔の人が作った道具・ゴミ
クイズ１　古墳時代は米作りが盛ん。
クイズ２　土器は食事をおいしくしたか。
③ 縄文・弥生・古墳時代の特徴
④ 弥生時代のお墓方形周溝墓と人骨（朝日遺跡）
クイズ３　愛知で一番大きな古墳は断夫山古墳
クイズ４　尾張地方の代表的な埴輪は円筒埴輪
⑤ 古墳時代の時代区分　遺跡・土器編年
⑥ 断夫山古墳の写真
⑦ 古墳から出土したもの　人形・舟形埴輪
⑧ 古墳から出土したもの　三角縁神獣鏡
クイズ５　古墳時代の焼き物は須恵器である
クイズ６　尾張地方からは銅鏡は出土していない
⑨ 津島の弥生時代（寺野遺跡の遺物写真）
⑩ 阿弥陀寺遺跡・大渕遺跡の写真
⑪ 森南遺跡・二ツ寺神明社古墳の写真
⑫ 奥津社古墳・三角縁神獣鏡の写真
⑬ 富士社古墳・築山古墳・二ツ寺神明社古墳の写真
⑭ 奥津社古墳の写真
⑮ 味美二子山古墳の写真

【スライド学習内容②】

ワクワク古墳学習では社会科教育を専攻する大学院生と授業づくりを行った。５月より４回の打合せを経て、教材づくりと指導案の作成を行った。当日、午後からの講義とペーパークラフトによる古墳・土器づくりの説明を大学院生に依頼した。また当日、１時間前に大学生を集め、子どもたちの学習支援の仕方についてお願いした。

今回の「ワクワク古墳学習」は、参加した子どもたちにとって学校以外の場所で子どもを伸ばす場になると共に、参加した大学生にとっても教職を目指すためにどのような学習をしていくとよいかを理解する場となったようである。

昨年度に引き続き、愛知県埋蔵文化財調査センターから海部地区から出土した遺物を借用してきた。子どもたちは本物の出土物をさわったり、においをかいだりすることができ、古墳時代の焼き物の固さを実感することができた。また弥生時代の土器も借用してあったので、土器の違いを比較することがで

きた。午前中は「古墳とは何か」「海部地区の古墳とその出土物」についてスライドを見て、学習を深めた。この授業については、あま市教育委員会に勤める浅井が担当した。海部地区には、県内で最初に三角縁神獣鏡が出土した前方後方墳である奥津社古墳と県内で最も古い時代と考えられる二ツ寺神明社古墳が現存する。そこで、津島ロータリークラブの役員の方たちの車に分乗し、あま市にある二ツ寺神明社古墳・あま市美和歴史民俗資料館と愛西市にある奥津社古墳を見学した。歴史民俗資料館では、遺跡と出土物について、学芸員から説明を受けた。また子どもたちは、平野の真ん中に明らかに人工と思われる高まりがあるのを実感し、これが古墳の名残であることを理解することができた。地域に古墳があり、三角縁神獣鏡などが身近に出土していることに気づくこともできた。

午後からは大学院生が犬山市にある「青塚古墳とその出土物」に関する授業を行った。青塚古墳は愛知県で２番目に大きな前方後円墳である。古墳の構造・埴輪・石鏃（せきぞく）などについて説明を行った。クイズを出しながら、子どもたちは楽しく学習を進めることができた。子どもたちは「メモをとりながら聞くといいよ」の一言で真剣にメモをとることもできた。その後で、古墳と埴輪のペーパークラフトのキットを作成した。古墳のキットは全員が完成させることができたが、壺型埴輪のキットは難しくて、参加者の中で１人だけしか完成させられなかった。事前準備の不足を感じた。キットはＮＰＯ法人「にわ里ネット」の製作によるもので、ペーパークラフトの製作を通して、体験的に古墳・埴輪づくりを楽しむことができた。

『ワクワク古墳学習』の事後のアンケート調査で、子どもたちは古墳時代のことが「よくわかった１１名」「わかった９名」、古墳時代の学習が「好きになった１４名」「少し好きになった７名」と好意的な回答をした。又感想として、「土器の種類がたくさんあり、自分でも土器を見つけてみたい」「卑弥呼の鏡があると知り、見に行きたくなった」「古墳作りが楽しかった。テレビを使った説明やクイズが楽しかった」「色々な古墳を見学することができたので楽しかった。学生ボランティアの人たちと話したのが楽しかった。飛び出す古墳づくりも楽しかった。達成感があった。みんなでご飯を食べたのも楽しかった」「大学生の人とたくさんしゃべって楽しかった。私が知らない事とか初めて見る物がたくさんあった。お昼はみんなとしゃべりながらマックを食べて楽しかった。本物の古墳や出土品を見ることができて嬉しかった」「住んでいる近くに古墳があり、びっくりした。話がわかりやすくて勉強になった」などと書いていた。今回の学習で、子どもたちは知的好奇心を高め、学習意欲を増すことができたことがわかる。

今回、学習の企画・運営の段階から、大学院生・大学生と共に授業づくりを進めるようにした。学生たちにとり、この企画そのものが教師になるためのエキササイズになるように心掛けた。授業を行った大学院生は、「久しぶりに古墳時代について勉強した。小学生に古墳について教えることがあったが、事前に勉強しておけば良かったと思った。小学６年生の女の子４人を担当したが、だんだん慣れてきてすごく喋ってくれるようになった。小学生と触れ合う機会となり、とても良い経験となった。自分の知識に足りない部分があり、しっかりと教えられなかったのが残念だった。今回、ボランティアに参加してとても良かった」又子どもをサポートしてくれた大学生は「１日中学ぶことが多く、小学生を見ているととても元気になった。私が今まで大学の教職の授業で学んだことが、実際に活用することができて良かった。浅井先生や森さんのように上手に説明は出来ないと感じた。残りの２年間で頑張ろうと思った。土器などを皆に渡すとき『必ず両手で』や話を聞くときは『しっかりと聞くこと』など最初にルールを言うことがとても大切で大変なことを知った」と感想をまとめた。

3.3　実践記録『キャッスルワールド信長探検隊』

開校式	９：１５～　９：３０
「清須城」「勝幡城」	９：３０～１０：１５
清須城周辺見学	１０：１５～１２：３０
昼食・休憩	１３：１５～１４：００
「安土城」	１４：００～１４：４５
安土城・信長描写	１４：４５～１５：４５
閉校式	１５：４５～１６：００

『ドキドキ弥生学習』『ワクワク古墳学習』に続いて、平成２５年度は織田信長と関係のある城について学習を深め、戦国時代のイメージを豊かにし、遺跡や遺物を手掛かりにして当時生きた人々に思いを寄せることを学習のねらいとした。復元の清須城の

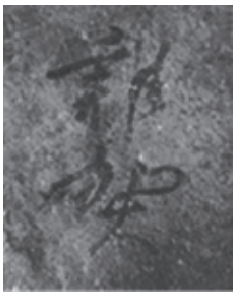
展示物と清州城下町遺跡から出土した遺物を実際に見たりふれたりすることにした。児童はあま市（７人）津島市（１７人）愛西市（１２人）の小学生が参加した。内訳は４年生（１２人）５年生（４人）６年生（１９人）であった。大学生ボランティアは大学院生３名、大学生６名が参加した。

「清須城」「勝幡城」
① 写真勝幡城碑　信長の一生【１】
② 写真桶狭間合戦図屏風　信長の一生【２】
③ 勝幡城について
④ 写真清須城城本丸の石垣・信長がつくった城
⑤ 写真清須城石垣石の墨書「雑賀孫一郎」
⑥ 信長の肖像画　長篠合戦図屏風
⑦ 信長の肖像画
⑧ 信長の銅像（勝幡・清須・岐阜・安土）
「安土城」
① 安土城写真・イラスト
② 織田信長の一生（長篠の戦い）
③「信長の上洛築城・戦略・城のねらい」
④ 安土城の位置
⑤ 現在の安土山
⑥ 安土実測図
クイズ１　織田方の城が攻撃されたらどうするか。
⑦ 写真鉄甲船復元図
⑧ 安土城は堅固な城
⑨ 城の工夫について
⑩ 城の虎口について
⑪ 安土城　伝　黒金門跡　模式図
⑫ 虎口での戦い方
クイズ2　大手道の石段は石仏や碁石か
クイズ3　なぜ安土城には天主閣があったのか
⑬ 天主閣跡からの眺め
⑭ 安土城下町のジオラマ
⑮ 安土城出土金箔瓦
⑯ 出土した陶磁器片・木簡・花入
⑰ 復元戦国時代の料理

【スライド学習内容　③】

午前の学習会では「勝幡城」「清須城」について学んだ。勝幡城跡は、愛西市の石田学芸員などの地道な研究の積み重ねで、信長誕生の地として有力となってきた。また信長の一生については『信長公記首巻』の「信長が堀田道空の館で天人の舞（女踊り）をした」エピソードをもとに、津島衆と信長との関係について考えた。

また清須城本丸付近から出土した金箔瓦・石垣石・胴木などのスライドを見た。これらの出土遺物は浅井が愛知県埋蔵文化財センター調査課に勤務していた時に発掘現場で見つけたものであり、話の内容も発掘現場の雰囲気を伝える臨場感に富んだ内容であった。



【写真④　清須城本丸付近石垣と石垣石墨書】

安土城の学習では、信長の一生の長篠の戦いから本能寺の変までについて説明を行った。子どもたちに安土城の位置や城としての工夫（虎口・石垣）などについても考えさせた。安土城跡のスライドも多数見せた。歴史好きな子どもたちが集まっていたので、積極的に意見を述べ、学習活動に参加していた。信長と尾張西部地域とのかかわりを示す史跡や出土遺物などの写真により、子どもたちには身近な歴史について理解しやすかったのでないかと考える。

「焙烙は今のフライパン」と説明するなど今の生活と関連づける説明を行った。また火縄銃の弾丸なども提示した。「清須城」の見学では、「桶狭間の戦い」にのぞむ若き日の織田信長の蝋人形をはじめ、多くの展示品をグループごとで丁寧に見学した。城下町のジオラマを通して、戦国時代のイメージを豊かにすることができた。

事後アンケートの結果では、織田信長の時代のことが「よくわかった」（25 人）「わかった」（9 人）、戦国・安土桃山時代の学習が「好きになった」（23 人）「少し好きになった」（13 人）と回答した。子どもたちはこの学習を通して、さらに興味や関心を高めることができた。

3.4 実践記録『祭りを学ぶⅠ・Ⅱ』

平成 27 年・28 年度の２年間、尾張津島天王祭の学習会を開催した。尾張津島天王祭が県内５つの祭礼とともに『山・鉾・屋台行事』のユネスコ無形文化遺産に一括登録を目指すことになったためである。そこで、子どもたちがあまり知っていない（実は津島市民もあまり知っていない）『尾張津島天王祭』の意義と概要について学ぶことを計画した。祭り学習の一環として、祭り保存会の人から太鼓・笛などの

祭り囃子の体験学習も行うことにした。

開校式	９：００～　９：１５
「祭り学習（１）」	９：１５～１０：００
「祭り学習（２）」	１０：１０～１０：５５
津島神社境内見学	１１：００～１２：００
昼食・休憩	１２：１０～１３：００
「祭り囃子を学ぶ」	１３：００～１４：３０
「祭りの絵葉書」作り	１４：４５～１５：４０
閉校式	１５：４５～１６：００

平成28年度は７月10日の日曜日、尾張津島天王祭の２週間前の日曜日に実施した。場所は天王川公園に近い「わざ・語り・伝承の館」。作業学習ができる会場を選択した。津島市内の小学４年生～６年生60人が参加した。

この事業に先立ち、浅井は『ジュニア版　津島の祭』公式テキストを執筆・編集した。津島ロータリークラブの社会貢献事業で、６００部印刷し、各小中学校に 50 冊ずつテキストを寄贈していただいた。

この事業は、津島市・津島市教育委員会・津島ロータリークラブ・ＮＰＯ法人まちづくり津島とコラボレーションし、ユネスコ世界無形文化遺産登録をめざした。（この論文を執筆している12月１日に世界文化遺産登録が決定した）また教職をめざす大学生の力を借りて、この学習会を運営し、教職に必要な力を身につける機会とした。

「祭り学習（1)」では大学生の祖父江加菜さん（愛知教育大学４年生）が講師を務めた。「祭りの日程」や「巻藁舟」「車楽舟」のつくりなどについて説明をした。「宵祭と朝祭の特徴を考えよう」というのが主発問で、写真をもとに巻藁舟や車楽舟の数、提灯の数、２つの舟の違いに気づくことが授業のねらいとなっていた。

「祭り学習(2)」は浅井が講師を務めた。尾張津島天王祭を学ぶためのクイズ問題とその回答のスライドを用意した。

午前の最後に津島神社の境内を見学した。特に巻藁船と車楽舟のミニチュア(５分の１)と宝物館を見学した。また津島神社の名物「あかだ・くつわ」の説明を聞いた。

午後から「祭り囃子」の体験学習を行った。保存会のメンバーに講師を務めていただき、締太鼓・鼓・横笛など祭りで使用する楽器を演奏した。まさに参加型・体験型の学習会となり、子どもたちの意欲的な学習が見られた。最後に学習のまとめとして、宵祭・朝祭についてわかったことを絵に描いた。この学習会を通して、子どもたちは尾張津島天王祭のことが「よくわかった」(44人)「わかった」(18人)、尾張津島天王祭が「好きになった」(49人)、尾張津島天王祭に「見に行きたい」(55 人）とアンケートに回答した。

クイズ①	尾張津島天王祭はどの神様を喜ばすための祭でしたか。その神様のご利益は。
回答　①	牛頭天王、疫病退散
クイズ②	ア宵祭。舟は何艘ですか。提灯の数はいくつですか。　イ朝祭。舟は何艘。
回答　②	５艘　提灯の数は縦に12.半円形に365個。現在は400とも言われています。朝祭は６艘。
クイズ③	浪合記という本に尾張津島天王祭の始まりが書かれている。
回答　③	○。四家七党の武士たちに守られて、信州浪合から三河を通り、津島に来たことが記されています。
クイズ④	祭の行われた場所は。
回答　④	天王川公園。
クイズ⑤	宵祭の舟の名前は。朝祭の舟の名前は。
回答　⑤	巻藁舟と車楽舟
クイズ⑥	尾張津島天王祭で津島五ヶ村の舟はどこで組み立てられるか。
回答　⑥	車河戸。祭河戸。
クイズ⑦	朝祭で増える舟はどこの舟か。
回答　⑦	市江。現在の愛西市と弥富市。
クイズ⑧	朝祭で先頭を行く舟はどこの舟か。
回答　⑧	市江舟。市江ではこの祭を市江祭と言っています。
クイズ⑨	布鉾をもった若者たちは何人天王川に飛び込みますか。
回答　⑨	１０人
クイズ⑩	朝祭の深夜、暗闇の中で行われる神事とは。
回答　⑩	神葭流し神事

【スライド学習内容　④】

子どもたちは「天王祭には宵祭・朝祭・神葭流し神事があるなんて知らなかったです。お囃子の体験をしたときは、お囃子をしている人はとてもすごいと思いました。お囃子の楽器をひくのが上手になったら、皆に披露したいと思います」「今まで不思議に思っていたことが良くわかり、スッキリしました。すごい歴史があるのにどうして皆は良く知らないのだろうと思いました。これからクイズなどを行い、広めていきたいです」「体験や分かりやすいプレゼンで祭のことがよく分かりました。友達とも仲良くなれました。祭りの歴史は長いと思いました。祭への疑問や不思議に思っていたことを解決できて、なんか良かった」「楽器の体験が面白かったです。特に横

笛ができたのが良かったです。難しかったけれど、音が出て、貴重な体験をしたなと思いました」「学習会に参加して、もっと天王祭のことを知りたいと思います。天王祭にはあらためて歴史がいっぱいだと思いました。巻藁船を始めて見て、こんなにすごいんだと思いました。これからは家でも祭について勉強したいと思います」などと感想を書いていた。

7月24日、朝祭当日に祭り場面の写真を手がかりにして、祭り会場を散策した。「祭りフォトテーリング」と名付けた。子どもたちは学習したことをもとに積極的･意欲的に祭り見学を行うことができた。

6　成果と課題

学習の成果として

① 実践をはじめて6年が経過した。複数の社会教育団体が予算面の支援をし、歴史学習イベントの事務局の役割を果たすようになった。

② 教職をめざす大学生にとって、天王子ども塾が教育臨床の場となった。社会科に興味をもつ学生にとり、格好の教材研究・発問検討の場となった。

③ 座学（講義）だけでなく、見学や体験学習を行うことで、子どもたちが自分とのかかわりを意識した学習展開となっている。「テキストの熟読」→「資料説明（プレゼン・スライド）」→「見学」→「お囃子体験」→「学習の振り返り」といった学習の流れを確立した。

④ お祭りやまちづくりを進める団体のメンバーと学習の場をもつことで、祭りや津島のまちづくりに主体的にかかわっていく意識を高めることができた。実際に祭りに参加する子どもたちがあらわれた。

⑤ 天王子ども塾は「伝統文化学習」の「文化体験」「文化伝承」を学ぶ機会となっている。体験することで、理解を深め、さらに探究する学習展開を創り上げてきた。

今後の課題として

・歴史学習が他人事や知識偏重で終わっていないか１つのテーマをじっくり深く追いかける学習展開を考えていきたい。

・「文化伝承」「文化保存」を考えた学習づくりをめざしたい。

参考文献

「郷土愛」はふるさと検定から（Ⅱ）―「津島の達人 ジュニア選手権」「ドキ☆土器☆弥生古墳学習」の実践から―平山勉・浅井厚視（名城大学教職センター研究紀要第 10 巻 2013）

「あま市教育委員会の挑戦」平山　勉・浅井厚視（名城大学教職センター研究紀要第 11 巻　2014）

「郷土愛を育てるふるさと検定―『津島の津人ジュニア検定』の実践を通して―」浅井厚視（愛知学泉大学　地域社会デザイン総合研究所　第４号　2016）

（原稿受理年月日　2016 年 12 月 5 日）